



日本ルイ・アームストロング協会

ワンダフルワールド通信 No.78

日本ルイ・アームストロング協会 (ワンダフルワールド・ジャズ・ファウンデーション=WJF) 2013年9月発行
〒279-0011 浦安市美浜 4-7-15 WJF 事務局 Tel.047-351-4464 FAX047-355-1004 Email: saints@js9.so-net.ne.jp

ホームページ <http://members3.jcom.home.ne.jp/wjf/>

発行人 代表・外山喜雄 編集長・山口義憲 編集・小泉良夫

「スウィング・ドルフィンズ」が渡米…外山夫妻の“積年の夢”が次々と実現！

第13回 真夏のサッチモ・サマーフェスト あの大観衆の前で堂々の演奏

“ジャズの故郷”ニューオリンズが子供たちの熱演に燃え、沸き上がった！！

“銃に代えて楽器を！”—外山喜雄・恵子夫妻が日本ルイ・アームストロング協会 (ワンダフルワールド・ジャズ・ファウンデーション=WJF) を発足させてまもなく20年！ その間、ニューオリンズの子供たちに贈った楽器は、すでに800点を超えた。その恩返しとしてニューオリンズから東日本大震災被災地の子供たちへの楽器の支援、ニューオリンズ・ヤングバンドの来日と日米交流へと続く。そして今回、駐日アメリカ大使館 TOMODACHIイニシアティブと国際交流基金の支援もあって、気仙沼ジュニアジャズオーケストラ「スウィング・ドルフィンズ」が渡米、ニューオリンズで友達との再会へと連なってい

き…外山夫妻の“積年の夢”が奇跡的に次々と実現していった。そんな中で今年2013年も、なんと素晴らしい『外山喜雄&セインツと行く ニューオリンズ・ニューヨーク サッチモの旅』が賑やかに、華やかに…そして何よりも感動的に繰り広げられた。その感動の第一は、やはりドルフィンズと同行できたこと。WJF 会員はもとより、これまで陰で支えてくれてきた何百人もの善意の方々も、きっと我が事のように喜んでくれているに違いない。

今年も『サッチモの旅』に加わって、そんなクライマックスの中に飛び込むことができた。さっそくプレイバック！ (小泉良夫)



憧れのニューオリンズで外山夫妻(左上)とともに「サッチモ・サマーフェスト」に参加したスウィング・ドルフィンズ。その可愛いパフォーマンスにサッチモも天国から「オー・イエー！」=8月3日

1

**出発前日、成田へ「スウィング・ドルフィンズ」の“夢の旅”が始まった
再会、交歓、演奏…どこへ行ってもスーパースター
「サッチモの旅」一行18人も同行“歴史の証人”になった！？**

ルース駐日アメリカ大使もビデオで激励

「スウィング・ドルフィンズ」(以下ドルフィンズ)の旅立ちは、渡米前日の**7月30日(火)**午前8時。宮城・気仙沼市の花の道パーキングに勢揃いしたドルフィンズのメンバーは全19人(高校生1+中学生18)。みんなカンカン帽をかぶって粋な装い。これにバンドリーダーで指揮者の須藤丈市さんら地元からの随行者4人が加わってバスで成田へ出発！ ホテル日航成田に入ったのは午後5時。なんとハナから約9時間、バスの長旅。それでもみんな、期待に胸をふくらませて元気いっぱいの笑顔を見せる。

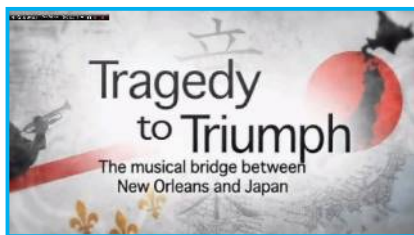


ホテルでの夕食後、渡米前夜のオリエンテーションに耳を傾ける。もちろん外山夫妻も姿を見せニューオリンズ・ガイド。プロジェクターを使って駐日アメリカ大使、ジョン・ルースさんからドルフィンズへのビデオメッセージも伝えられる。「ようこそTOMODACHIイニシアティブへ」との歓迎の言葉に加えて、ルースさんは「アメリカを回って英語を学び、友達をたくさん作って下さい。そして、みなさんも素晴らしいリーダーになって欲しい」と激励した(写真上)。

TOMODACHIのロゴ入りTシャツも大使館側から全員にプレゼントされ、出発準備は完了！

米テレビ局が大特集！すでに“超有名人”

そんな折、ニューオリンズでは地元テレビ局WWLが30分近くにわたって、ドルフィンズを紹介していた。キャスターはエリック・ポールセンさん。そう昨年、ニューオリンズのヤングバンドとともに東北の被災地を訪れ、全行程を取材して回った方。外山さんにいわせるとニューオリンズの“超有名人”さんだ。番組(写真右)では、外山夫妻の諸々の活動、ハリケーン「カトリーナ」に襲われたニューオリンズへの楽器の贈呈、ドルフィンズへの恩返し、ヤングバンドの被災地訪問と日米ジュニアバンド交流…そして、「さあ、この可愛



らしいドルフィンズが、あすニューオリンズにやってきますよ」と伝えたものだから、もう前評判は十分すぎるほど高まっていた。すでにドルフィンズも“有名人”の仲間入り。

ミネアポリスでドルフィンズは駆け足の乗り継ぎ

翌31日(水)、ドルフィンズと「サッチモの旅」一行は空港出発ロビーで合流(写真下)、同じ便で成田を発った。今年にはミネアポリス経由。ミネアポリスでドルフィンズと我々は二手に分かれて米国内線に乗り継ぐ。ドルフィンズ一行は乗り継ぎの時間が1時間半ほどしかなく入国手続きの後、



駆け足の乗り継ぎ。まさに“飛び乗り”といった感じだったが、全員無事ぎりぎりの搭乗。私は以前、何度も乗り継ぎに失敗して、“Oh, too

late!”って言われたものです。ドルフィンズは一足先にルイ・アームストロング・ニューオリンズ国際空港に着いたが、一部の荷物と楽器3

点が間に合わずに積み残されてしまった。

我々はほぼ4時間後の乗り継ぎで、逆に暇をもてあましていた。そんなこともあって、ニューオリンズに着いた我々が手荷物受取所 (baggage claim area) の片隅に乱雑に放

置されていたこれらの楽器類を偶然に見、回収できた。なんとラッキー！ それも我々の貸し切りバスに積み込んで、ドルフィンズが宿泊しているホテル、ハイアット・プレイス・ニューオリンズに届けることができた。みんなほっと一息。ドタバ

タしたが、これが“厄払い？”となって、お後はすべて順風満帆だった。

我々の宿泊先はホテル・プロビンシャル。

新設の「ランドリー・ウォーカー」高校で交歓会

8月1日(木)、ロサンゼルスから駆けつけたトロンボーン

の助っ人、アイラ・ネパス(Ira Nepus)さんも加わって、「サッチモの旅」一行は午前中に南部大農園の豪邸「ホマス・ハウス・プランテーション」を見学し、ここで南部の特製ランチに舌鼓を打つ。ドルフィンズ一行はこの間、ルイ・アームストロング公園など市内見学をしていた。

午後3時半、我々はニューオリンズ大橋を渡ってミシシッピ河対岸のオー・ペリー・ウォーカー高校へ。ドルフィンズ一行とはほぼ同着。ウォーカー高校はこの7月、L・B・ランドリー高校と合併して当地の新校舎に移っていた。学校名も2校を合わせて「ランドリー・ウォーカー高校」。同校バンドルームでウィルバート・ローリンズ先生はじめ、昨年来日したあの顔この顔とにこやかに再会。育ち盛りのせいか、みんな見違えるほど背が高くなっていた。ティピティナス財団のベサニー・ポールセンさん、エミリー・メナードさんも姿を見せた。



ローリンズ先生の指揮で総勢70人もの両校のバンドが割れんばかりの豪快な演奏を続ける(写真①)。外山夫妻のセインツも熱演(写真②)。校長先生のマリー・ローリーさんが目を細めて見守る。

地元タイムズ・ペキュン紙の名コラムニスト、シーラ・ストラウプさんも再会を喜ぶ。今年もシーラさんの感動的な記事が大きく掲載された(11~13面に翻訳)。フジテレビ、朝日新聞、WWLテレビなど取材陣でごった返す。ネット

には外山夫妻が驚嘆するほどの記事、動画があふれる。

セインツが「セカンドライン」を演奏するとドルフィンズもバンドのメンバーも一緒になって賑やかに行進(写真③)。

演奏が終わるとニューオリンズの家庭料理がたっぷり出された。サッチモが大好きだったレッド・ビーンズ・アンド・ライス、ガンボ、ジャンバラヤ…各テーブルで食事をしながら楽しい交歓が繰り広げられる。

日米中学バンド同士が意気投合し踊りまくる



マーティン・バーマー・チャーター・スクールでの交歓会。同じ中学生同士とあってみんなノリまくった

2日(金)朝8時からWWL局でドルフィンズのTV生出演があった。例の人気キャスター、エリックさんが取り仕切る。ホテルのテレビで終わりの方だけしか見られなかったが、蝶ネクタイ姿のドルフィンズがスタジオで生演奏していた。もうすっかりアイドルですね！見物に出掛けた外山夫妻もエリックさんに迎えられて飛び入り出演してしまったという。

そのドルフィンズを追って、この日はマーティン・バーマー・チャーター・スクール(中学校)の交歓会に出掛ける。ドルフィンズと同校バンドが代わる代わる演奏するなか、今回、ドルフィンズに付き添ってガイド兼通訳をしてくれていた、まゆみさん(ニューオリンズ在住のドラマー)がバンドMCのユーモラスな挨拶、演奏曲の説明をしっかりと伝えてくれる。

ドルフィンズのトランペッター、西條春香さん(中3)が、ドルフィンズ支援してくれている米歌手、ヘレン・メルルさん

の大ヒット曲「You'd Be So Nice To Come Home To」を感謝の気持ちも込めて可愛らしく歌い上げた。

ここでも昼食に家庭料理がたっぷり振る舞われる。昼食後、ドルフィンズとこの中学生が、同じ中学生同士とあって

すっかり意気投合、ダンスでノリまくる。東北の女のコッていえばどうしたってシャイでおとなしい…なあんて思いがちだけれど、

どうしてどうして、あんなに元気にはじけちゃって！やはりニューオリンズの開放的な雰囲気はみんなに乗り移ってしまったに違いない。以後どこへ行ってもみんな天真爛漫に輪をかけていたみたいでしたよ。

外輪蒸気船「ナッチェス」でデキシーを満喫

サッチモの旅一行は、昔ながらの外輪蒸気船、ミシシッピ河のスチームボート「ナッチェス」号に乗船して、一献傾け、夜景を満喫しながら、デュークス・オブ・デキシーランドの演奏に耳を傾ける(写真下)。涼やかな風が川面を流れ、何とも清々しい。外山さんとセインツはリハーサルやら練習やらで、乗船しなかったのは残念。毎年ここでデキシーセインツ+デュークスの熱演を聴いていたのに…。

このリバーボートの乗船場で8月5日、ドルフィンズが熱演し、乗船待ちのお客さんからも喝采を浴びたという。

ツアー常連の中村宏先生(ジャズ評論家、防衛医大名誉教授)のご提案で下船した後、フレンチクォーターでも一番の人気レストラン「アクメ」へ。生ガキをたっぷり楽しんだ。私たちの隣のテーブルの外国人から「これもう食べられないので差し上げます」とか、生ガキ1ダースがそっくり手つかずに回ってきた。いやはや「ごっつあんです」。

大喝采！ドルフィンズはまさにスーパースター

さあ、3日(土)はお待ちかね「サッチモ・サマーフェスト」。13周年の今年は特に盛りだくさん。12:15~13:15、ドルフ

インズが地元一流バンドに仲間入りして、いよいよ晴れのステージに立つこともその1つ(1面にも写真)。

ニューオリンズ滞在中のドルフィンズの演奏曲目として、①バンドテーマ ②バンドスタンドブギ ③サマータイム ④チュニジアの夜 ⑤ユード・ビー・ソー・ナイス・トゥ・カム

⑥ホーム・トゥ ⑦イツ・オールライト・ウィズミー ⑧ヤードバードスイート ⑨バードランド ⑩ベイジン・ストリート・ブルース ⑪ホワット・ア・ワンダフル・ワールド ⑫ニュー・セカンドライン ⑬若いって素晴らしい ⑭バンドテーマ。アンコールは⑭上を向いて歩こう 盛りだくさんと用意されていた。

バンドMCが「ニューオリンズのみなさん有難う！」(まゆみさんの通訳)に拍手喝采。外山さんも「ハリケーンのときは私たちがあなた方を助けました。今度はあなた方が私たちを助けてくれました。本当に有難う」と英語で挨拶。会場でテレビ・インタビューに答えた地元の男性が「楽器を贈ったのは、私たちの感謝の気持ちのほんの一部なんですよ」といっていたのが印象的。

ドルフィンズのことはもうすっかり知れ渡っていて、有名どころかまさにスーパースター。その熱演にはスタンディング・オベーションが続く(写真上)。ステージ前では、ドルフィンズの演奏に合わせて、ダンスに興じるカップルで大賑わい。途中から外山さんらセインツも加わって演奏を盛り上げる。ある若い女性は「とても良かったわ。素晴らしい演奏ね。ニューオリンズでそれが聴けてもう最高！」と。

ニューオリンズ市議会議長のジャクリーン・クラークソンさんがステージに上がってドルフィンズへのニューオリンズ市からの感謝状を須藤さんに手渡す(写真上の下段)。

終演後、ドルフィンズみんなのアイドル的存在だったジョン・マイケル(tp)のお母さん、アンジー・ブラッドフォードさんが姿を見せ、ドルフィンズ全員にストリングスをプレゼ



ント。ジョン・マイケルが、ハンター・バーガミー (b) とともにボストン (マサチューセッツ州) ・パークリー音楽大学の12週間にも及ぶ夏期講座の研修に出ていて会えないこともわかっていて。みんながっかりしていたが、アンジーさんの訪問には大喜び。「ジョン・マイケルも、みなさんに会えないって泣いていたわ」とアンジーさん。絆はちゃんとつながっている。

会場で売られていた公式Tシャツの背面にサマーフェスト出演全バンドが印刷されていて「Swing Dolphins」もしっかり刷り込まれていた。みんな記念に買ったかなあ。

サマーフェストのハイライト、一番のお勧め！

13:30~14:30は、サッチモサマーフェスト・オールスターズの出演(写真右上)。このオールスターズには、外山夫妻のほか、サッチモの後半生を活写した名著『ホワット・ア・ワンダフル・ワールド』の著者、リッキー・リカルディ(p)、サッチモ生誕記念100年バンドのリーダー、デヴィッド・オストワルド (tuba) らが出演。ダウンビート誌の元編集長、ダン・モーガンスターンさんは、意外な艶のあるヴォーカルを披露した。

17:00~18:15 デキシースェインツが出演。セインツは、昨年同様、外山喜雄(tp,vo)・恵子 (p, bj) 夫妻と広津誠 (cl)、藤崎羊一 (b)、サバオ渡辺 (ds) に加えて、アイラ・ネバス (t b) といった面々。

演奏曲は、①南部の夕暮れ ②ハロー・ドーリー！ ③サニーサイド・オブ・ザ・ストリート ④ブギウギ ⑤スイングしなけりや意味がない ⑥ヒービー・ジービーズ ⑦ディッ

パー・マウス・ブルース ⑧ウエスト・エンド・ブルース ⑨タイガー・ラグ ⑩(師匠のトラミー・ヤングにちなんでアイラさんをフィーチャーした)テイント・ワット・ユー・ドゥー ⑪ビビディ・バビディ・ブー ⑫セカンドライン ⑬聖者の行進 ⑭この素晴らしき世界

「外山喜雄はサッチモ・サマーフェストのハイライト！！」「フェスティバルのお勧めは、エリス・マルサリスと外山喜雄」…などと、地元紙が事前にかき立てていたものだから、



もう会場は超満員。サッチモのスカット誕生秘話を実演して見せた「ヒービー・ジービーズ」では、譜面を落として慌ててスカットする“ジャパニーズ・サッチモ”に爆

笑が沸き上がる。聴衆を引きつける外山さんの話術、演技、セインツの演奏は、やはり前評判通りのサマーフェスト・ピ

カ1のハイライト。ステージと聴衆の心が1つにつながる。選曲がバラエティーに富んでいて、「今年はプログラムも良かったねえ」と中村先生からもお褒めの言葉。

セインツの出演が終わり、ステージを下りると、ファンがセインツを取り巻き記念撮影や握手、そしてサイン攻め。公式ポスター、扇子、プログラム、看板…いろんなものが飛び出す。ニューオーリンズ在住の日本人家族らも、駆けつけて誇らしげに声をかける。

恵子さんが会場を引き上げる際、恵子さんの肩をぼんと叩く若者。ン、ン！？ 誰だっけ？ 恵子さんも最初は気づかなかったようだが、昨年来日したティピティナス・インターン・バンドのドラマー、ジョー (ジョセフ) ・C・ダイソン君だった。来日当時は見事なアフロヘアーだったのに、この日は、すっかり丸坊主に刈り込んで頭の右側面に

「LOVE」なんて文字まで剃り込んでいた。まったく見違えるほどの変身ぶりだった。私は恵子さんに「誰ですか？」と尋ねてしまった。「やだー、ジョーよ！」ですって。



サッチモ称える「ジャズ・ミサ」とセカンドライン

4日(日)は朝10時、トレメ地区にあるカトリック教会へ。シドニー・ベシエ(c1,ss)でもお馴染みの、セント・オーガスチン教会(地区司祭=クエンティン・E・ムーディー師)で行われる恒例の「ジャズ・ミサ」に参加する。

ニューヨークからルイ・アームストロング・ハウス・ミュージアムのマイケル・コグスウェル館長やチューバ奏者のデヴィッド、地元のジャクリーンさんら関係者多数が出席する中、トレメ・ブラスバンドと聖歌隊に加わって外山さんと広津さんも礼拝堂でともに演奏する(写真①)。



礼拝、ムーディーさんのお説教やら「ワンダフル・ワールド」の斉唱(これがまた素晴らしい声!), 献金などがあって、午前11時半からサッチモに敬意を表する華やかなセカンドラインのパレードに移る。

教会からムーディー神父、ジャクリーンさん、外山夫妻らを先頭にバンドや参加者が出てくると教会前はもう大混雑。ここでも夫妻は主役だ。大男のカメラマンらが殺到して私なんか隅にはじけ飛ばされそうになる。それでも頑張ってワンショット(写真②)。地元紙のこのジャズ・ミサのメイン写真と比べると、トホホでしたが…。

一方でズーラーの慈善団体が中心となって会長さん(グランド・マーシャル)を先頭にサマーフェスト会場まで(今年は例年ほどでもなかったが)炎天下、ブラスバンドや地元の人たちのセカンドラインの行列が延々と続く。ツアー参加者のみなさんの顔も途中あちこちで見かけましたが散り散りになってしまいました。

パレードでTBCブラスバンドのショーン君とも遭遇した(写真③の右端)。彼も握手で再会を喜んでくれた。彼はハリケーンで壊滅したG. W. カーバー高校の卒業生。被災した彼に外山夫妻がステキなトランペットをプレゼントしている。そんな仲間も、ここには沢山いて、彼らの元気な姿を確認するのも、このツアーの楽しみのひとつ。

「ティピティナス」で財団ファミリーフェスティバル

さて、ドルフィンズは午後3時半からのライブハウス「ティピティナス」でのティピティナス財団によるファミリーフェスティバルに参加することになっていた。外山夫妻らはそちらへも急行。私もタクシーで追いかける。

ライブハウスでは、すでにいろいろなライブが続行中で、私が到着して間もなく、ティピティナス・インターン・バンドのリーダーで昨年来日したドナルド・ハリソンさん(as,vo=この日は電子ピアノ)率いるバンドが熱演。来日メンバーのウィル・ハイタワー(c1,ts)とマックス=ピエール・モラン(b)が出演していた(写真④)。



終わって、ステージではドルフィンズの演奏準備に入っていて、その間、ウォーカー高校のバンドが場内をパレードする(写真⑤)。なかなか豪快でしたよ。ドルフィンズもしっかり演奏(写真⑥)、

高校野球ではないけれど、みんな回を追うごとに(演奏を重ねるごとに)上手になってきている?

外山さんも熱演サッチモ・トリビュート

場面は変わって午後7時30分、サッチモ・サマーフェストのフィナーレ。これはもう、立錐の余地もないほどの超満員。えっ、まさか!? あの米コロンビアの名プロデューサ

一だったジョージ・アヴァキアンさん(94歳!)が車椅子で会場の大混雑のなか今年も例年のように、にこやかに姿を見せた。サッチモ、マイルス・デイヴィス、デイヴ・ブルーベック…数多くのスーパースターのレコードを世に送り出した今や伝説のプロデューサー。私も思わず「ジョージ！」って手を握ってしまった。

フィナーレの最後の最後は外山さんも加わったトランペッター全員集合によるサッチモ・トリビュート。腕自慢のトランペッターが、これで



もかこれでもかと吹きまくる。地元で超人気のカーミット・ラ

ッフィン(写真右の中央)もノリまくる。外山さんも負けてはいない…その迫力には聴いている方が(無理しないですよ、と)心配してしまったほどだ。2時間にも及ぶ熱狂的なフィナーレは午後9時半にやっと終了。サッチモの旅一行はともかく

一息ついて、外山夫妻らとフレンチ・マーケット・レストランへ。ニューオリンズの打ち上げといった感じ。

そんなこんなでニューオリンズの旅を締めくくったが、今年はどういうわけか滞在中、一度も激しいスコールに見舞われなかったし、気温も例年よりちょっぴり和らいでい

♪You'd Be So Nice…可愛い歌声にヘレン・メリルさん大喜び ドルフィンズからのお礼状とともにビデオ映像も届ける ニューヨークではジャズも自由時間もそれぞれたっぷり楽しむ

NYへ…空港であの人、この人と遭遇サプライズ

5日(月)、ニューオリンズ発11:05 国内線でNYラガー

ディア空港へ向かう。なんとその空港の出発ゲートにローリンズ先生がいた! 「わー、何で、何で!」といった感じで皆が取り巻く(写真右上段)。カンサスへバンドのユニフォームを買いに行くのだとか。ちょっと遅れてやってきた外山夫妻もこの“サプライズ”には、笑顔をはじけさせる。



サプライズはまだあった。車椅子2台でアヴァキアンさんと奥様がやってきた。アヴァキアンさんの車椅子を押していた娘さんのご主人が、にっこり手を振って「また来年もお会いしましょうね」(写真上段の下段)。ホント、そうできたら最高! ヒコーキも同じで搭乗して座席に向かう際、またお会いしてしまった。本当に国際的な空港なんですわねえ、ここは。



空路約3時間、現地時間午後3時過ぎ、ラガーディア空港に着く。宿泊先は、ここ数年同じカーネギーホールのお隣さん、7番街東57丁目のサッチモの常宿、ウェリントンホテル。「どうですみなさん、そろそろ和食が恋しくなったのでは? よろしかったら、みんなで参りましょう」との外山さんの提案に飛びついて、みんな揃って夕食は「サッポロ」。

ここ「SAPPORO」(7番街東49丁目)は、お寿司こそないが、ラーメンから丼物までもう何でもありの大衆的な和風レストラン。私は、さっそく枝豆、冷や奴、餃子でビール、日本酒を傾ける。去年なんか毎日来てしまっ、外山夫妻と鉢合わせしたこともあった。

開館10年!のサッチモ・ハウス博物館



6日(火)、朝からイーストリバーを渡ってクイ

ーンズ区コロナのルイ・アームストロング・ハウス・ミュージアム(LAHM)とサッチモのお墓があるフラッシング墓地を訪問するバスツアーに出向く。

サッチモ・ハウス博物館は2003年に開館した。当時、外山夫妻が日本からの義援金を持参して贈呈もしている。ここはサッチモとルシール夫人が1943年からサッチモが

亡くなった1971年まで一緒に暮らしていた自宅。サッチモのようなセレブならマンハッタンのセントラルパーク近くのアパートに豪邸を構えても良かったのに…。

そこはサッチモのこと、黒人も多く庶民的なこの地を選んだのだろう。超セレブにしては極めて地味な家だが、サッチモはこの場所と隣人をこよなく愛していた。

午前10時に到着して、さっそく外山さんが入り口前でトランペットを奏でる(写真上)。いつもなら、「あら、来たのね、待っていたのよ」とにこやかに出迎えてくれた名物隣人のセルマさんが一昨年12月3日亡くなってしまった(享年88歳)。そのセルマさん、遺言でこの彼女の自宅をそっくり、サッチモ・ハウス博物館に寄付してくれたという。

我々を出迎えてくれたLAHM館長のマイケル・コグスウェルさんの話では、これまで近くのクイーンズ大学のアーカイブに預けていたサッチモ関係の資料をそっくりセルマさん宅に移したという。いまセルマさんはサッチモ夫妻と同じフラッシング墓地に埋葬されている。

メゴールドで全面鏡張りのバスルーム、当時としては最高級のオーディオ装置を備えたサッチモ自慢の書斎、サッチモが息を引き取ったベッドルームなど、世界各地をツアーで回った際、あちこちで記念に集めた美術品も各部屋を飾られている。どこを見ても興味は尽きない。

特に見逃せないのがこの書斎。埋め込みのオープンリールのテープレコーダーがあって、これでサッチモは自身の演奏を聴いたり、ダビングしたり、雑談、対談、ぼやきや怒り、独り言、とっておきの話…何でもかんでも録音し残している。それらをテープケースに収めて、ケースには新聞の切り抜き、コンサートのプログラムなどでコラージュを作っ



サッチモ夫妻のお墓を囲んだツアー一行18人。(墓碑の左・前列左から)坂下泉、佐藤美智子、飛田八栄子、(同後列左から)中村宏、佐藤修、藤崎羊一、広津誠、飛田利勝、外山喜雄、(墓碑の右・前列左から)中村美代子、磯野博子、小泉富子、小泉厚之、(同後列左から)外山恵子、サバオ渡辺、小泉良夫、外山弘光、外山登代のみなさん＝敬称略

最高級のオーディオ装置を備えた自慢の書斎

スタッフの案内で約40分、館内を見学して回る。見所は、シンプルでも超豪華なキッチン、金属類はすべてメ

で楽しんでいた。それもなかなかの傑作揃いで、大変な美的感覚の持ち主でもあった。自宅に帰ったときは、ほとんどこの部屋で過ごしていたに違いない。隠されたスピーカ

ーからサッチモが話しかけてくる。

フラッシング墓地でセインツが鎮魂の演奏



あつて(5分ぐらい歩く?)、例年かんかん照りのなかを汗だくで歩いた。お墓の前では木陰を見つけて飛び込んだものです。それが今年はまるで初秋のような清々しさでみなさんゆったり。墓碑の左右に小さな星条旗が2本、その回りはすでに沢山の花で囲まれていた。その墓前に花を飾り、セインツが鎮魂曲を奏でる(写真①)。広津さんが「南無阿弥陀仏…」と手を合わせて念仏を唱える。墓碑の上の白いトランペットをよく見てみると、何やら“お賽銭”まであがっていた。お墓を囲んで全員集合の記念写真を「はい、パチリ」(前ページの写真)。

豪華なイタリア料理とセントラルパーク散策

今年の昼食は、いつものブラジル・バーベキユ食べ放題に代



わって、マンハッタンのど真ん中の5番街にあるイタリアン・レス



トラン「CARMINE(カーマイン)」本店。広々としてなかなか豪華なレストラン(同②)。日本に行ってすっかり日本びいきになったというウエイトレスのサービスで食事が運ばれてくる。サラダ、サーモン、ペンネ、スパゲッティ、チキン…これでもかっと言わんばかりの大



続いてサッチモ夫妻

が眠るフラッシング墓地へ。毎年行きがけに中村美代子・佐藤美智子両夫人と恵子さんの3人が道路を隔てた向かいの大きな花屋さんでサッチモ夫妻のお墓に捧げる花を買ってくる。この3人、名付けて“フラワー・シスターズ”。

墓地の入り口からサッチモ夫妻のお墓まで結構距離が

盛り。あちこちで続けざまに♪ハッピー・バースデー・トゥーユー…の音があがる。こちらを負けてはいられない。7月生まれが4人！ 広津さん、坂下泉さん、飛田八栄子さん、それに私、9月生まれが藤崎さん。みんなまとめておめでとう！

昼食後、バスで市内見学。セントラルパークなどを回る。ジョン・レノンが生前住んでいて、入口先で殺害された「ダコタ・ハウス」から道路を横切ってすぐの公園内に“記念碑ストロベリー・フィールズ”(同③)がある。ビートルズの「ストロベリー・フィールズ・フォーエバー」にちなんでつけられ

たもので、ファンや観光客が記念撮影に沢山集まっています。大賑わい。

夜は1920年代のビッグバンド演奏を堪能

夜はブロードウェイのエジソン・ホテル地階にあるクラブ「ソフィア」でヴィンス・ジオルダーノ(tuba、b、bass・sax)のビッグバンド「ナイト・ホークス」を観賞。1920年代の懐かしいスタイルを守っていて、ホーン奏者はラッパの前に大きなメガホンを当てて演奏、マイクも昔風。外山さんは、そんな仲間に温かく迎えられて演奏に加わる(前ページの写真④)。

サッチモの旅では毎年訪れるお馴染みの店だが、外山さんの話では、残念ながらまもなく閉店、改装してしまうそうで、大勢のダンス愛好家のカップルが古き良き時代の最後のサウンドに合わせて華麗に踊る(同⑤)。

ハードランドでサッチモ生誕100年記念バンド

7日(水)は夕刻まで自由行動。午後5時から「ハードランド」でのライブ。ニューオリンズでのサマーフェストのオールスターズに出演していたデヴィッド・オストワルド(tuba)率いるサッチモ生誕100年記念バンドが出演。このバンドに外山夫妻、広津、サバオ渡辺の“オールスターズ”が加わっての演奏はやはり特筆すべきものがありました(写真上の3枚)。我々はまさに正面特等席でワインを傾けながらゴージャスな気分を観賞、たっぷり堪能させていただいた。

8日(木)は終日まったくの自由行動。再開された自由の女神、セントラルパーク、メトロポリタンなど各種博物館、美術館、ショッピング…さてどこにする？

高校球児だった藤崎さんと大学でも野球部だったという坂下泉さんは、メッツ球場へ。イチローのヤンキースはロードに出ていた。

外山夫妻と中村、佐藤夫妻、磯野さんらは、ヘレン・メリ

ルさん宅へ。中村先生はヘレンさんとは、彼女が初来日した時からもう50年来のお友達で、主治医でもあり、ツアーのさいも毎年旧交を温めている。

この機会にヘレンさんに捧げたドルフィンズの3会場の演奏、

「You'd Be So Nice To Come Home To」のビデオとヴォーカルの西條春奈さんの感謝の手紙を披露。手紙と可愛い歌声にヘレンさんは大喜びだったという(写真下、中央)。

成田は灼熱！日本の夏はメチャ暑かった

9日(金) NYケネディー空港発14:15のDL173便で帰路に。機内で日付変更線を越える。渡米の行きは1日得、帰りは1日損！？そして、日本時間10日(土)ほぼ定刻の16:45頃、成田空港着。全員、無事何事もなく「サッチモの旅」を終えた。なんと成田空港に降り立ったとたんムッと暑さが襲う。これって今年

のニューオリンズよりも暑いんじゃない。入国手続き終了後、解散。皆さん本当にご苦労様でした。外山夫妻もあちこち大変でしたね。

ドルフィンズは前日、涙、涙…でニューオリンズを離れ、無事帰国、生涯忘れることができない“夢の旅”を終えて気仙沼に帰った。

(おわり)



善意のワンダフルワールド——素晴らしい世界

外山喜雄・恵子 ジャズを通じた心と心のつながり

その手助けができた喜び

記事：シーラ・ストロブ記者



タイムズ・ペキュン紙から翻訳

Photos by Chris Granger

Yoshio and Keiko Toyama happy to be a part of 'heart to heart through jazz'

8月1日、外山喜雄・恵子夫妻のストーリーに新しいページが加わった。ランドリー・ウォーカー高校のバンドルームを訪れた彼らは、再びニューオリンズの若いミュージシャンのために、日本からピカピカの楽器を持って来てくれたのだ。

「1994年以来、800本になりました」。外山さんの顔には、いつものように笑顔があふれていた。

2日に開幕するサッチモ・サマーフェストの前日、高校のバンドルームは立ち見が出る満席、室内は温かさに包まれていた。高校のオレンジ・クラッシュ・



マーチングバンドと向かい合って、日本の気仙沼からやってきた中学生ジャズバンド「スウィング・ドルフィンズ」のメンバー、そして毎年8月外山夫妻とともに東京からニューオリンズへ「巡礼の旅」にやってくるワンダフルワールド・ジャズ・ファウンデーションのツアー客たち。

「ランドリー・ウォーカー高校へようこそ！！」とウィルバート・ローリンズ先生。

「この新しいバンドルームで生徒たちを教える機会をもらって、心から光栄に思っています。」

彼は日本語の通訳のために間を置きながら挨拶を始めた。外山夫妻はこれまで毎年、オー・ベリー・ウォーカー高校を訪れていた。今年ミシシッピ河西岸ウエストバンクの2つの高校が統合し現在、生徒たちはL. B. ランドリー通りにある統合した高校の新校舎に通っている。

ウォーカー高校のバンドディレクターだったローリンズ先生と、この日本のカップルとの温かい交流は、もう10年をこえる。

「最初にあなたに会った2003年、私たちには楽器がほとんどありませんでした」と、ローリンズ先生。「でも、今は、楽器が増えて、中学校の生徒たちにお下がりをあげられるまでになったのです」。

バンドルームでは、高校生バンドの力強い演奏が始まった。普通は野外演奏が主だが、今日はインドア用にちょっぴりワンダウンしていた。

「マーチングバンドの本格的な演奏を味わっていただきたいのですが、本気になると、皆さんを、席から吹き飛ばしてしまいそうで…」ローリンズ先生は、こういって観客の笑いを誘った。

音楽で子供たちを救おう

それは音楽が流れ、英語と日本語が飛び交った素晴らしい昼下がりであった。

ローリンズ先生と外山さん達が、どのように長い年月を通じて友人以上の存在になってきたか。そして、ニューオリンズと日本の音楽交流という彼らの夢がどのように生まれたか、が彼ら自身の口から語られた。



外山喜雄さん(中央)がドルフィンズの女の子の手を引っ張るようにして席から立ち上げらせ、セカンドライン・パレードに参加させた。左はクラリネット奏者、広津誠さん＝8月1日(木)にニューオリンズのランドリー・ウォーカー高校で

「私たちの街の生活は危険や問題が一杯です。でも、このバンドルームでは子供たちを救うことができるのです」とローリンズ先生。

音楽を通じてニューオリンズの子供たちを助ける——このことが、この二人を結びつけた共通の考えだった。

外山さんはこの日、恵子夫人と45年前にニューオリンズにきてトラディショナル・ジャズを学ばせてもらったこと。そして、この街でジャズを学び、何物にも代えがたい贈り物もらったこと。そのお礼がしたいとずっと思っていたことを話した。彼ら

の団体、ワンダフルワールド・ジャズ・ファウンデーション(日本ルイ・アームストロング協会)が、当時カーバー高校で教えていたローリンズ先生とカーバー高校バンドに、初めて39点

の楽器を贈呈しにやってきたのは2003年、10年前の事だった。

「こんな夢がかんうなんて、思いもしませんでした」と外山さん。「実は、最初にローリンズ先生にあった時、サッチモを教えた先生にそっくりだ！と思ったんです」



私は、その日の事を懐かしく思い出して思わず微笑んでいた。外山さんのルイ・アームストロング・スタイルの演奏、そして、あのサッチモのようなガラガラ声で歌うのを

聞いたのはそれが初めてだった。その日は、彼が“ポップス”ことサッチモを心から愛し、サッチモにすべてを捧げていることを、私を感じとった日でもあった。その日、彼は、トランペットやトロンボーン、サクスを手渡してこう言った。「日本の人々は、ジャズという素晴らしい音楽を世界に与えてくれたアメリカと、ニューオーリンズ、そしてサッチモに感謝したいと思っていますのです」と。

あれから10年、ランドリー・ウォーカー高校のバンドルームに集まった人々に、ローリンズ先生はこう説明した。2011の津波を見てどんなに驚かされたか、そして日本の方々からの援助へのささやかな恩返しとして、ニューオーリンズのミュージシャン達に呼びかけ、日本支援ジャムセッションを開催、2700ドルを集めたことを。

音楽による交流

ローリンズ先生は、彼と彼の友人の“ヨシ”が長い間語り合ってきたアイデアについても語った。それはニューオーリンズの若いミュージシャンを日本へ招き、また、逆に日本の若いミュージシャンをニューオーリンズに連れてくるという夢だった。

その第1章は昨年の10月に始まった。ウォーカー高校のチョーゼン・ワンズ・ブラスバンドとティピティナス財団のインター・バンドのメンバーが昨年日本を訪問、10日間のコンサートツアーを行ったのだ。そして第2章は先週スウィング・ドルフィンズがニューオーリンズを訪問、現実のものとなった。ドルフィンズたちは、サッチモ・サマーフェストとライブハウス「ティピティナス」に出演、ルイジアナ探索の旅も満喫したのだ。



「この夢は、ティピティナス財団の支援なしにはかなわなかったでしょう」とローリンズ先生は深い感謝の念を語った。日本が津波で被災した後、ティピティナス財団の創設者ローランドとメアリー・フォン・カーナトフスキーは、外山さんを通じてドルフィンズが楽器をなくしたことを知った。バンドのメンバー達は、自宅を失い、リハーサル室を失い、楽器もなくなっていたのだ。そこで財団は子供たちに新しい楽器をプレゼントしようと、楽器の購入代金1万1000ドルを円に換えて外山さんへ送った。

日本での昨年のコンサートツアーも、ティピティナス財団が支援し、国際交流基金、日本ルイ・アームストロング協会との共催で実現した。そして、そのことが今年交流につながり、この三者とTOMODACHIイニシアティブの協力も得て、スウィング・ドルフィンズのニューオーリンズ訪問が実現した。

ローリンズ先生のスピーチに続いて、外山喜雄とデキシーセイイツが、この行事にピッタリの曲、『この素晴らしい世界』を演奏した。続いて『ハロー・ドリー！』、そして、マルディグラでもお決まりの『セカンドライン』。この曲が始まるともう会場は大騒ぎとなり、ドルフィンズも、高校のオレンジ・クラッシュ・バンドのメンバーも皆立ち上がり踊り出した。

名物のガンボ料理を囲み写真交換

パーティーの最後には素敵な交換風景が見られた。ドルフィンズとランドリー・ウォーカーのバンドメンバー達全員と一緒に座り、ガンボやレッド・ビーンズ・アンド・ライス、ジャンバラヤ、デザートブレッド・プディングを食べた。でも女の子たち全員の興味は、食べることより、携帯電話の写真を見せ合うことだったようだ。

「まあ、あなたって、まるで可愛い赤ちゃん人形のようなわ」。

オレンジ・クラッシュのメンバーの1人が叫んだ。「これはあなたのママ？ これはボーイフレンド？」

ローリンズ先生は、この国際的な交流に心から感激していた。



「この光景は私にとっては夢のようです」。

私は身振り手振りでコミュニケーションし、話し笑い転がっている女の子達のテーブルを見て、しみじみと思い出していた。

このすべての交流は、たった2人から始まったのだと…。

いや、もしルイ・アームストロングを加えたら3人…だったかもしれない。

この心の交流のスタートは1950年代にさかのぼる。アメリカ映画に出ていた“ポップス(ルイ・アームストロング)”の音楽と恋に落ちた日本の少年がストーリーの始まりだ。「『グレン・ミラー物語』や『5つの銅貨』のようなジャズ映画を沢山見ました。ルイが出ていたんです」と外山さん。中学生の時トランペットを購入、独学でマスターし、高校のころにはジャズは自分の将来だと感じていたという。大学時代にはプリザベーションホール・バンドが日本で演奏、同窓の恵子夫人ともども、彼らはすっかりとりこになってしまった。

「バンド・マネージャーのアラン・ジェフ氏は、そんなにジャズが好きなら、ニューオリンズに来るべきだ、と言ってくれたのです」と外山さん。

同じ年に、ルイ・アームストロングも来日した。外山さんは楽屋に行き楽屋のドアをノックした。「カム・イン」中から、あの紛れもない声が聞こえた。

「私はテーブルの上に置いてあった彼のトランペットを見て言いました。『ちょっと見てもいいですか？』と。ルイは微笑んでいました」と外山さん。ルイは「いいよ」を意味するように笑顔を見せた。彼はそのホーンを掴んで、吹いてしまった。

「それは、一生決して忘れられない出来事でした」と彼は言う。

ニューオリンズへの恩返し

彼と恵子さんは卒業後結婚、渡米しニューオリンズのフレンチクォーターに移り住んだ。そして、ミュージシャンとしての活動をしながら、プリザベーションホールの偉大なジャズマン達たちからジャズを学んだ。6年間の修業後、彼らは、ニューオリンズ伝統のジャズを演奏するため帰国、その日以来、常にニューオリンズで過ごした日々感謝の念を持ち続けてきた。

「まだ若くて幼かった私達を、ニューオリンズのミュージシャンたちは愛し、世話をし、ジャズを教えてくださいました」と恵子さん。「そう、だから、私たちはいつも何か恩返しをしなければと思っていました」。

1994年、マルディグラにやってきた外山夫妻は、高校のマーチングバンドの楽器が古くなり、以前のようなキラリと光る新しい楽器が全くなくなってしまったことに驚いた。また、若者たちが銃を持っていることを知り悲しくなった。それがワンダフルワールド・ジャズ・ファウンデーション(日本ルイ・アームストロング協会)を思いついたきっかけだった。

「それが『銃に代えて楽器を』ということになったのです」と外山さん。「ルイ・アームストロングは11か12歳の時にピストルを撃って少年院に入った。そんなことがあって彼はトランペットを手にするようになったのです。このサッチモの人生を考え子供達にホーンを手渡すというのは、私たちの会の象徴的なメッセージでもありました」。

この外山さんのファウンデーションは‘善意の素晴らしい世界 Wonderful World of Good を作り上げている。ハリケーン・カトリーナの後、夫妻は楽器を失ったニューオリンズのミュージシャンのためにプロ級の品質の楽器を集め、また一連のコンサートを開催、ニューオリンズの音楽支援のために8万ドル以上もの義援金を集めてきた。

実は、震災で夫妻も地震の被害を受けたのだが、彼らは自分たちの被害よりも、自分たちの国に音楽を取り戻すことを優先した。

「トイレも風呂も使えず、洗濯もできない…。家は傾いてしまつて。でも、もう、そんな生活に慣れました」。車のついた事務椅子に座り、傾いた床の上を転がっている恵子さんのビデオが、外山さんからメールで送られてきた。ドルフィンズの話を知ったとき、外山さんは彼らを助けなければと思ったという。メールで送られてきた少女の話は忘れることができない。「その少女は音楽がやりたくて、スライドさせる位置に手を動かし、トロンボーンなしでひたすら練習を続けた」という。

ティピティナスからの支援金で夫妻はドルフィンズに楽器を贈り、数週間後、バンドは避難所の前でコンサートを開く。夫妻はこのバンドを見るために悪天候のなか350マイルもの旅をした。コンサートの後、外山さんからのメールには、「雨が降らないかと、この屋外コンサートをとても心配していました。でもその日は、まるでドルフィンズみんなの笑顔のように、最高に清々しく、美しい一日でした」とあった。

サッチモ・サマーフェスト出演後の月曜日、外山夫妻とワンダフルワールド・ジャズ・ファウンデーションのメンバーはニューオリンズを立ち、ニューヨークのクイーンズ区にあるルイ・アームストロングの家へ向かった。帰国前、彼は電話で、ドルフィンズはとても楽しくて家に帰りたくないと言っていると伝えてきた。

「彼らは一生、このことを忘れることはないと思います」と彼は言った。「日本と米国がジャズを通して心と心をつないでいくことは素晴らしいことですし、私たちがその架け橋になれたことを嬉しく思っています」。

ニューオリンズでのドルフィンズの公演を見て、どのように思ったのか、私が彼に尋ねたとき、彼はちょっと口

を閉ざした後…。

「それは感動的でした。あまりにも…」と彼は震える声で言った。「私たちは、何年も何年も長い道のりを歩いてきましたが、こんなことが起こるなんて夢にも思いませんでした。まるで魔法にかかったようで、もしかすると、天国のサッチモが、私達にいたずらをしているのかもしれないネ」。

(By Sheila Stroup, The Times-Picayune)



シーラさんのこの記事は、ニューオリンズの「タイムズ・ペキューン」紙の2ページ全面をそっくり埋め付くし(上段)、ネット版(下段)は「Yoshio Toyama」で同紙から検索すると過去記事から最新のこの記事まで延々と記述が連なる

善意のリレー——数え切れないほどの皆さまの支援で実現

気仙沼「スウィング・ドルフィンズ」ニューオリンズへの“夢の渡米”

まるで天国のサッチモが魔法をかけているような展開だった —— 外山喜雄・恵子

ニューオリンズの皆さん ありがとうございます！

東日本大震災の津波で家も練習場も楽器も流されてしまった、気仙沼ジュニアジャズオーケストラ「スウィング・ドルフィンズ」(以下ドルフィンズ)のもとにニューオリンズからの寄付で楽器が届き、「ニューオリンズの皆さん、有難うございました！！」という可愛いビデオ・メッセージがテレビに、またネットに流れたのは震災から1ヵ月後、2011年4月半ばの事でした。



当時、避難所となっていた気仙沼総合体育館前広場で、仙台・定禅寺ストリートジャズフェスティバル主催のコンサートが4月24日に予定されました。ドルフィンズのメンバーの中には、実際にその体育館のテントに一家で避難し、生活しているメンバーもいました。この日、出演したいのに楽器がなくてドルフィンズが出演できないという話を教えてくださいましたのは、2005年以来、仙台からニューオリンズ・カトリーナ被害の支援の活動を続けてくださっていた、ジャズカフェ「ジャズミー・ブルースNOLA」の店主、佐々木孝夫さん。日本からニューオリンズの子供たちに贈った楽器の恩返しに、被災地の子供達に楽器を贈りたいというニューオリンズのライブハウス、ティピティナスの財団からの申し出とタイミングがぴつたりと重なり、被災地へのニューオリンズからの楽器寄付が1ヵ月足らずで実現しました(写真上)。

被災地を結んだ日米“善意のリレー”

ティピティナスからの寄付でバンド全員の楽器を購入、1994年の日本レイ・アームストロング協会発足時から楽器を破格の条件でお世話いただき、楽器の無償修理もグローバル管楽器技術学院で引き受けてくださっている楽器商(株)グローバルの福田忠道会長、植田正之さんに大変お世話になりました。“ジャズの街”宇都宮のミヤ・ジャズインを立ち上げた吉原郷之典さんは、宇都宮ジュニアジャズオーケストラが使っていたドラムセットを寄付。仙台のお店に集まった

山のような楽器を佐々木さんが気仙沼に届けたのは4月16日、震災からわずか1ヵ月という速さでした。保護者の方がお手紙をくれたように、“学校が始まるよりも早くドルフィンズの練習が再開”しました。テレビ新聞の取材もたくさん入りました。

リーダーの須藤丈市さんの、「サン、ハイッ！」という掛け声が続いて「ニューオリンズの皆さん、有難うございました」。大部分が女子メンバーの

小中学生ジャズバンドが楽器を持ち、可愛らしく整列し叫んだジャズの故郷への日本語の感謝の言葉！

私達はその日、出席できませんでしたが、佐々木さんから送られてきた子供たちの笑顔と感謝の言葉の映像を見て、いつか、この子供たちに楽器を贈ってくれたニューオリンズを見せてあげたい…楽器を贈ってくれた子供たちと贈られた子供たち…カトリーナと津波という大変な被害をとともに体験した子供たちを交流させてあげたい…そんなことが頭に浮かんだのを覚えています。

天国のサッチモに届いた子供たちの声

子供たちの感謝のメッセージが天国のサッチモに届いたのでしょうか…その後の展開は、あたかもサッチモが天国で悪戯をしているかのようでした。私達があっけにとられている間に、まるで魔法のように扉が開かれてくるのです。

ジョン・V・ルース駐日アメリカ大使がこのドルフィンズの復活をツイッターで祝福し、これがきっかけとなってアメリカ大使館のTOMODACHIイニシアティブの交流プログラムにお話をすることができました。元ニュー

オリンズ総領事だった坂戸勝さんからは、国際交流基金のアメリカ・チームをご紹介いただき2012年のニューオリンズからの高校生来日が国際交流基金、ティピティナス財団、私達日本レイ・アームストロング協会(ワンダフルワールド・ジャズ・ファウンデーション=WJF)の三者共催、



佐々木孝夫さんの「みやぎ音楽支援ネットワーク」にご協力いただき実現、そして今年も、この三者の共催でTOMODACHIイニシアティブの交流として、憧れのニューオリンズ訪問をドルフィンズにプレゼントすることが出来たのです(写真右中央)。



活動を認めてくださったニューオリンズ総領事と総領事館のスタッフ。国際交流基金、アメリカ大使館とルース大使。最初に“銃に代えて楽器を”の趣旨と会

“サッチモの天使たち”に守られて…

思い出してみると1994年、日本ルイ・アームストロング協会発足のころから、私達はあたかもルイ・アームストロングが天国から派遣してくれるかのような、“サッチモの天使”のような皆さんに守られて活動してきたような気がします。ニューオリンズの高校でスラムの子供達に音楽を通して生活指導をしているウィルバート・ローリンズ先生、先生との最初の出会いからずっと見守ってくれ記事を書いてくれている地元紙タイムス・ペキューンのシーラ・ストラウプさん、市議会議長のジャッキー・クラークソンさん。そのような皆さんにラインをつないでくれた元ニューオリンズのガイド、美貴ローボックさん。今年800

本目の楽器を贈ることが出来ました。輸送を担当して下さった日本通運の皆様と関係をつないで下さった森忠彦さん。楽器購入のお世話下さり、寄贈された楽器の修理まで担当してくれている(株)グローバルの福田会長。また、同社と私たちをつないでくれた故鶴沢緑郎さん。仙台からニューオリンズ支援を続けてくださっている佐々木孝夫さん。会の趣旨に賛同して下さって力をいただいている理事各位、スタッフの皆さん、そして会員の皆様。毎年サッチモツアーにご参加、応援していただいている皆様。デキシーセインツのメンバー。サッチモ祭をスタートさせた大丸の肥後崎英二さんとサッチモ祭出演バンドの皆さん。ニューオリンズ支援緊急サッチモ祭でもお世話になったサッポロビール恵比寿麦酒記念館と岩間辰志・元サッポロビール社長。ジャズファンの皆様。また、全国から楽器や寄付を寄せて下さったアマチュアバンドの皆さん。ニューオリンズでも元ジャズ博物館長、ドン・マルキさん。サッチモサマーフェスのスタッフ。この



ネット上では、ドルフィンズの“夢の旅”が次々と広がっている

の発足を発信してくれた読売新聞の阪口忠義記者、大シリーズを組んでくださった夕刊フジの小泉良夫さん(現理事)、ジャパントイムス他で英文記事を何度も書いて下さった川島健記者ほかメディアの皆様。とても書ききれない方々が、サッチモの使いのように現れ、救いの手を差し出して下さったような気がしています。

夏休みのステキなプレゼント

昨年と今年、どちらの子供たちも初めて訪問する他国で最初は緊張と不安を隠せない様子でした。特に中学生のドルフィンズにとっての初めての団体での海外旅行は、健康面も大変心配だったのですが何事もなく無事にツアー

が終わりほっとしています。

ちょうど疲れが出る5日目あたりにメンバーに聞きました。「だいじょうぶ？ 疲れない？」。帰ってきた答えは、「ニューオリンズ、楽しい〜。家に帰りたくな〜い！！」笑顔がはじけそうな答えでした。でも、その日、ホームシックになるころにメンバーに配るためにと、須藤さんが父兄から

預かってきていたお手紙も子供たちに渡され、子供たちは涙を浮かべていたとのこと。

全員心より楽しいニューオリンズでの時を過ごし、メンバーとご同行の方々に“夢の旅”と“ジャズジャズジャズの夏休み”をプレゼントすることができて、心よりうれしく思っています。

そして、この会をご支援いただいている皆様にも長年背中を押していただき続けてくれることが出来た活動が、サッチモも喜んでくれるような結果を残せていること…心から皆様にお礼を申し上げたいと思います。皆様の応援があって、初めてできたことだと思っております。

嬉しいお手紙(概要)

ありがとうございます

<ニューオリンズ在住のドラマー、 今回ガイド・通訳を担当されたまゆみさん>

ドルフィンズは無事 帰路につき、ニューオリンズ空港では、涙 涙のお別れでした。滞在中はテレビ出演の効果もあり、街の至る所で「ドルフィンズでしょう？」と声をかけられる人気者でした。サッチモフェスティバルの会場で、震災後楽器を贈ってくれた立役者、ティピティナス財団の当時の担当者キム・カットナーさんが会いに来てくれたので、ドルフィンズにキムを紹介しようという方なのかを説明しました。皆と並んだ写真(下)を撮ってあげると、キムは私に何度も「Mayumi, this means a lot!」と言って目を潤ませていました。一番最初からのキムと外山さんの努力を見て協力して来た私としては「キムにも何か」と思い、ドルフィンズのサインと篠原さんをお願いしてメッセージのカードを書いてもらいました。ドルフィンズのステッカー等を一緒に、来週に会って渡す予定です。



ベサニーを始め本当に沢山の人が、ドルフィンズがニューオリンズを満喫し、楽しい思い出を沢山 作れます様にと言う思いで頑張ったと思います。今回の体験が、ドルフィンズの子供達の未来に良い違いを創れば、私達も幸いです。

<ドルフィンズに同行の国際交流基金、篠原由香里さん>

外山さんのこれまでの長年のご活動があってこそ実現に至った国際交流です。ドルフィンズの皆さんにとっては、生涯思い出に残る、かけがえのない経験になったものと思います。(余談ですが、私までこの仕事をしていてよかったと胸がいっぱいになる場面がたくさんありました。サッチモ祭をはじめ、どの場面も感慨深かったですが、中でも中学校と高校でのお互いの目の輝きとはじけっぶりには感動しました。同年代のジャズプレーヤーとは瞬時に心が通じ合うものがあるようです)ヘレン・メルルさんとの双方向のやりとりも感動的です。今回の経験を宝物に、皆さんが気仙沼、宮城県、ひいては日本の将来を背負う一員として羽ばたいてくださることに期待します。

<気仙沼ジュニアジャズオーケストラ、須藤丈市さん>

一昨日ようやく仙台の自宅に無事帰宅致しました。約半月ぶりの帰宅です。



現実と向き合うこと、夢を追いかけること「生きる」と言うことは、そのどちらをも同じ運命として受け入れることとを感じる旅でした。数多くの人々との出会いとその優しさや思いやり

に感謝し、参加した子供達がこの経験を生かして、真の意味での復興に取り組む人材として育っていくことを願ってやみません。

ここに謹んで今回のプロジェクトに関わられた全ての皆様に心より感謝申し上げます。

海外旅行に不馴れなためか、帰国から4日を過ぎても未だに時差ぼけが治りません。(写真上は、感謝状をいただいたクラークソン市議会議長=左=、そして外山さん=右=とともに)

<ベルリン日独協会

坂戸勝さん(元在ニューオリンズ総領事)>

外山さんが、私たち多少ニューオリンズに関係した者の志を代表して、私たちにはとてもできない大きな仕事を果たしてくださったような気がします。

募集中!

♪ジャズを愛する皆様

どうか会員になって下さい!!

また皆様のお知り合いの方々に

ぜひ、WJFへのご入会をお勧め下さい

=WJF年会費=

一般会員(General Membership) ¥6,000

学生会員(Student Membership) ¥3,000

賛助会員(Friends of Louis Armstrong) ¥12,000

■会費のお振込み先■

郵便振替 00110-4-415986

ワンダフルワールド・J・F

銀行振込 三菱東京UFJ銀行浦安駅前支店

普通：5175119“ワンダフルワールド”

お問い合わせは：WJF事務局

TEL：047-351-4464

Fax：047-355-1004

Email:saints@js9.so-net.ne.jp

日本ルイ・アームストロング協会HP

検索エンジン：Yahoo,Googleで

ルイ・アームストロング

この夏、ニューオリンズで日本の子供達のジャズバンド「スウィング・ドルフィンズ」がサッチモ・フェストに出演、ステージでの見事な演奏ぶりに大観衆から絶賛の拍手が贈られ、さらに地元テレビに出演して知名度も最大限に向上、昨年来日の高校生バンドメンバーとの再会や地元中学生との音楽交流など、ニューオリンズでの素晴らしいイベントとなりました▼外山夫妻の20年間におよぶWJF活動が、ニューオリンズで花開いた2013年の夏でした。14~15ページで外山夫妻が感慨を述べています。また伝統ある地元紙のシーラ・ストロープ記者の記事を11~13ページに掲載しました▼恒例のジャズツアー・ニューヨーク編では、サッチモのお墓での鎮魂の演奏、ヘレン・メルルさん宅訪問や「ボードランド」ライブなど、ジャズ満喫の旅▼小泉良夫さんによるニューオリンズでのサマーフェストのハイライトや、ニューヨークのレポートは写真満載、臨場感あふれる報告です。どうぞお楽しみください。(山)

編集長から